

大阪上町台地における水文化の発掘とその現代的事とし

大阪大学大学院 学生会員 ○近藤隆二郎
大阪大学助教授 正会員 盛岡 通
大阪大学助手 正会員 城戸 由能
大阪大学大学院 学生会員 原田 弘之

DISCOVERD AQUA-CULTURAL CONTEXT IN HERITAGES AND ACTIVITIES
ON OSAKA-UEMACHI HILL TO PRODUCE CONCEPT IN EVENT MANAGEMENT

by R. KONDO, T. MORIOKA, Y. KIDO and H. HARADA

ABSTRACT

The environmental planning become to involve the spatial identical characteristics found out by means of analysis on historical literacy, written books, drawn maps and so on.

This study is to produce a concept in event management aiming environmental betterment from interpretation the contents of aqua-culture of the noted springs and wells on Uemachi-hill.

The results from these analyses as follows: 1) the fresh springs and wells of Uemachi-hill were indispensable for lives of people in Osaka especially before 1890. 2) Before modern water supply, water carriers named as 'MIZUYA' delivered clean water to citizens. 3) In Edo era peoples were conscious of the nature of pureness, sweetness, sustainability and holiness as drinking water.

Then we planned and managed an public-participated event named as 'UEMACHI-DAICHI MIZU MEGURI', in which the concept introduced from the historically relationship of human and springs/wells of Uemachi-hill had the main theme as 'You play as MIZUYA'. Participants enjoyed town watching and to bring water in one well and to throw water into another dried-up well as a ceremony for environmental resuscitation.

KEYWORDS: UEMACHI-HILL, NOTED SPRINGS AND WELLS, EVENT MANAGEMENT, AQUA-CULTURE

1. はじめに－歴史からの視点

地域の歴史の中に秘められていた史実を掘り起こす過程では、現在の暮らしのつながりの中に過去を読みとるだけでなく、その読みとりを純でかつ鋭い形式で現代に再提示するしかけが問われている。これまでは、魂の復元を設計領域でおこなうか、もしくは歴史的文化環境整備計画としてまちづくりに活かすかがなされてきた。本論文では、むしろ地域の意味の共有化と整備への状況形成の道具としてのこととしへのつながを試みる。

本論文は、大阪の上町台地を素材として取り上げ、この空間の持っていた水文化に注目し、湧水や井戸が大阪（大阪）の人びとの生活の中で持っていたかわりを抽出する。

まず、地の条件としての大坂と上町台地湧水群との関係を明確にするために、大坂の水事情について主に近世から明治にかけての歴史の変遷を捉える。

次に、名水としての湧水や井戸がどのように人びとに意識されたかを「天王寺七名水」を中心として江戸時代の大坂名所を記した文献を用いて考察する。

以上より、上町台地の持つ暮らしの水文化を明らかにし、ついで、現代への意味の照射の試みとして、その水文化の姿を再現して行ったイベント「上町台地水めぐり」について触れ、そのコンセプトの中に

歴史を内生化する一例を示す（図1）。

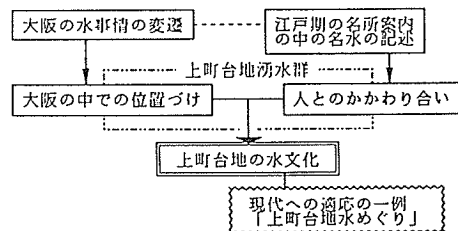


図1 研究のフロー

2. 大坂（大阪）の水と上町台地

文献をもとに、大坂の水事情の変遷と共に、その中での上町台地の位置づけについて考察する。

(1) 大坂の水事情

大坂は「水の都」「八百八橋」と言われるように、入り組んだ堀・水路に舟遊びや舟運を展開し、水を活用して潤っていたまちとしてみられがちである。しかし、日常生活に必要な飲料水においては、苦しい台所事情の上に成り立っていた。これは、江戸、仙台、水戸などのある程度の都市では、江戸時代には原始的な構造の水道が建設され、都市民の生活を支えていたのに対して、大阪では明治後期になるまで水道が建設されなかったことにも関連している。

この理由は、高木によって3つ挙げられている¹⁾。

- ①川（淀川系）の水質が優秀であったため
- ②政治的理由（城代統治の町人の町）
- ③地理的条件（大坂は平野で水源がない）

このうち、②の政治的理由はともかくとして、①の河水と③の地理的条件は、大阪独自の水とのかかわり合いを生み出していた。

大阪は、淀川水系として河川・堀が発達しており、古くから生活用水としては河川の水を生活用水として使用していた。このことが、水道の水源としては、わずかな高台である上町台地しかなかった地理的条件を補っていた。市内に井戸がなかったわけではなく、滞水層が海面下にあったために、井戸水は、塩分を含む「かなけ」であり、おもに飲水以外に用いられた。当時の市内の家庭は、ふたつの瓶を用意しており、飲水としては川の水を、その他の用水としては井戸水を使用していた。

1853(嘉永6)年に出版された『守貞漫稿』では、「大坂は井水塩気を帯ぶ、俗に是をかなけと云、鉄気也、貯井水鉄錆に似たる一物浮ひ飲食の用にならず」とあり、また文化文政期の大坂を描いた『街能囃』では、「イヤ水が汲置で悪ムリヤ正。モシ大坂も善処だが水にハ少し困リヤス。皆な買水でムリヤス。」「ハ引堀井戸ハムリヤせんかね。」「有ことハありやすが。泥がさして飲水にハ悪うムリヤスから。皆な川水を買て飲ヤス。」²⁾という会話を見ることができ、水生活が不便であった往時の大坂の水の状態を伺えよう。

この状況は明治になっても変わらなかった。俳人の松瀬青々は明治10年頃の自家の台所を次のように記述している。「台所のソコは上げ板で、上げ板を上げると、二枚合わす蓋がしてあって、大きな水瓶が二つ生かっていたのであった。近所の家では、大抵、水屋から水を買ふていたが、私の家には、若い者がいつも2人か3人いたので、それが暁早うに両国橋の西詰の川岸からクレイナ水を汲んできて水瓶に満たすのであった。」(『随感と随想』)

(2) 良水系である上町台地

このような水事情の中で、大阪の唯一の微地形である上町台地では、高台のくぼみより水が涌き出し、塩分が多くて飲水には適さなかった他の井戸水とは別格の清浄な水を提供していた。1691(元禄4)年の『新選増補大坂大絵図』³⁾の中では、天王寺周辺では、「寺島清水」「逢坂」そして清水寺の西崖下の

ところに「清水」という字を見つけることができる(図2)。

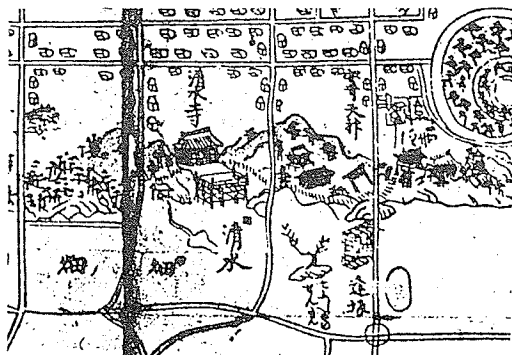


図2 古地図に見る天王寺名水(一部を拡大)
(元禄4年『新選増補大坂大絵図』より)

1675(延宝3)年に発刊された大坂の名所案内である『難波名所蘆分船』⁴⁾には、「逢坂清水」として「此の清水は。天王寺の。三水の随一なりと。由傳へり。いかなる三伏の夏。早魃にも。盥水なれば。涸ることなし」(図3)、「亀井の水」として「是



図3 「逢坂の清水」
(延宝3年『難波名所蘆分船』より)

は印度無熱地より竜宮城へ銀樋をかけ。また竜宮城より。天王寺へかけたところの盥水なりとかや。これまた三水の随一と也」と示されているように、上町台地の湧水群は、

生活に必要である清浄な水を提供してくれるところとして位置づけられ、中には信仰と結び付いて盥水となったものも多かった。

この上町台地の湧水群の需要が急騰したのは、洪水によって川水が濁るときであった。1808(享和2)年の台風と豪雨によって、淀川上流の水が溢れたときのことを書いている『榎並八箇洪水記』によれば、「此節 川水に小虫わき候よし、もっぱら舌いたく候ゆへ 川水呑人一人も無之候 鉢へ入見れば うごうご居るよし 井戸水はかなけ在之 飲水に成がたく 所々の水を取よせ用ひ候なり 別而増井清水 あふ坂の水 難波の名水成るゆへ あまりこんざ

つに付 処より改申候へども 其後又々勝手に汲可
申様所々へ張紙出し候」・「あふ坂の水[.]ちん銭
百より」・「処により百三、四十文掛り申候」と記
しており、いつもなら一荷六文から八文である逢坂
の水の値が、洪水時には百文から百三十文の高値に
なったことは、河水が不安定な供給源であり、上町
の名水がいかに貴重であったかがわかる(図4)。

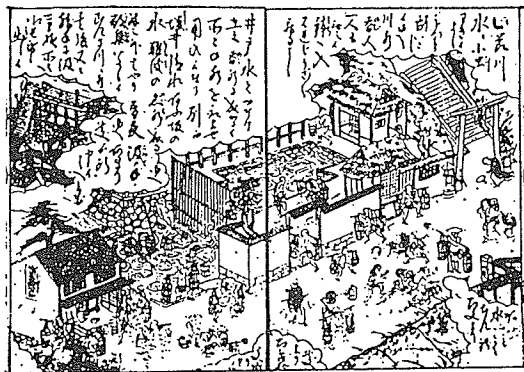


図4 「逢坂の清水」
(享和2年『榎並八箇洪水記』より)

大坂では、記録に残る洪水だけでも推古天皇以来
大正四年までで250回もあったといわれている⁵⁾。
洪水時の相坂清水の値が急騰した史実と合わせても、
河水だけでなく、上町台地の名水にも大坂の生活は
頼っていたことが伺える。

湧水群は、「天王寺七名水」「七名泉」「七井」
「三水」などと総称を与えられたのであるが、七名
水が何を指すかについても諸説がはっきりせず、い
わば、「たくさん」あったことを示していると言え
るであろう。

上町台地には寺社が数多く集まっているため、そ
の境内に湧くもの、あるいは掘られたものも多かつ
た。この水は神聖なるものとして、霊水として祠ら
れ、「みだりに汲むことを許さず」扱いを受けて守
られてきた。これらの霊水は、湯屋としての霊験や
眼病に効くといった習俗を展開し、単に水を分け与
えるものから、ひとつの民俗を生むことになり、名
所図会や小説の舞台にも登場するようになった。

それは、水を汲むことに人並ならぬ苦勞を感じて
いた大阪人たちの水に対する心のあらわれであった
であろう。

(3) 「水屋」の登場

この上町台地湧水群と、大坂の人びとを広く結び
付けるものとして「水屋」が登場した。「水屋」は

最初、河川の水や天王寺名水の水を汲みに行く労力
の代わりに努めていたことで銭をとっていたが、天
明(1781~1789)の頃に、嵐小六によって大きな変革
をもたらされたという。「其始め、此小六の乳母の
弟、小六のいえに食客同様に居したが、毎日此男に
天王寺村相坂の清水を一荷づつ汲に遣し飲水とす。
一時、小六思ふに、一荷の水に毎日相坂まで労をな
す程ならば、小舟に棹して淀川の水を汲みなば、飲
水澤なるべしとて、頓て小舟を造り、是に水稻をの
せ、彼男に日々淀川の水を汲取らせければ、近邊の
者も茶の水ばかりは、道頓堀の悪水飲まんより、淀
川の水を所望せんと、彼の水を遣い覚えしより、島
の内の大青楼二軒三軒いひあわせて、小舟を造りて
淀川の水を汲ませける。」(『浪華百時談』)とあ
るように、淀川の水を舟(「水舟」図5)を用いて
大量に輸送することによって、ひとつの産業形態に
まで発達した。

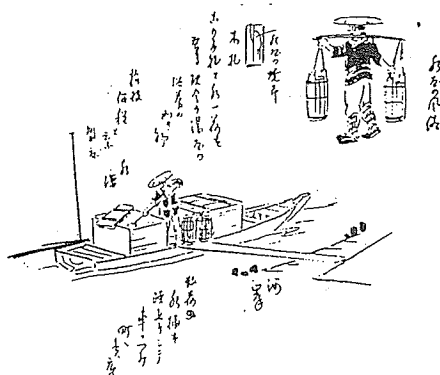


図5 水屋・水舟の様子
(昭和8年『明治大正大阪市史』より)

水を求めたい家は「水入用」の木札を家の表に出
して知らせ、水屋は、市内各所の橋下につないだ大
きな水槽に、淀川の水を積み込み、そこから桶で戸
毎に配ったのである。ちなみに、明治20年頃は、河
水の汲み取り場としては、

1. 淀川筋源八渡上流西側
2. 中津川筋字嬉ヶ崎
3. 淀川筋天満橋上流

が規定されていた⁶⁾。

つまり、大坂の人びとにとって水道とは、水屋で
あり、水源地から各家庭まで「人力」がつないでい
たのである。そして、原初的には、飲水の貴重な水
源として、上町台地の水が水屋によって大坂中に運
ばれたのである。

この上町台地湧水群がいかに、貴重な水源であっ

て、水屋の販売システムを介して広く水を提供していたかという事実を「大江岸水」の訴訟騒ぎに見ることができる⁷⁾。

天王寺七名水のひとつに数えられる泰聖寺境内の「金龍水」は、水質の清冽さとともに一種の甘味を帯びていることで、茶の水として重宝され、この水を手にいれようと、檀家でもないのに、わざわざ寺を何回も訪ねた人も多かったほどであった。そして、明治23年にこの「金龍水」のすぐ西に「大江岸水」が開削され、非常に良好な水質と豊富な水量が、飲料水はもとより、酒の元水あるいはラムネ用水に適合するとして需要が増大し、水屋の車が絶えない有様で、ついには簡易水道まで引くほどであった。一方、この「大江岸水」と「金龍水」の水源は同じものであり、「大江岸水」に水屋が並ぶようになって、「金龍水」の方はみるみるうちに水量が減った。そして、寺側と岸水側とで訴訟沙汰となり、寺側が敗訴し、これを苦にした住職が悶死するに至った。

つまり、安定した良質な水を提供する上町台地は、「水屋」にとっても近接の上質な水源であり、特に洪水時には、需要が殺到した。それを買う大坂の人びとにとっても、上町の水は「天王寺七名水」として、珍しいものという意味だけではなく、水を生むところとして大切なものとして位置づけられていた。

以上により、この江戸から明治初期までの大坂において、この上町名水系は、図6のような関係を大坂の人びとと結んでいたといえよう。つまり、神聖

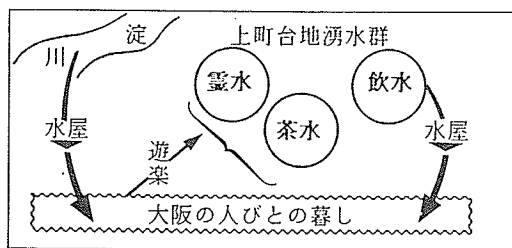


図6 大阪の人びとと上町台地湧水群

な水として参詣する「霊水」と、「飲水」を買わなければならない大坂の人たちにとって、上町台地は、寺社が多く、花見や坂のある景勝地という遊楽地であったと共に、飲み水の源であり、くらしの基盤として存在していたと言えよう。しかし、訴訟にあるように、容量をともなった環境資源としての認識とそれを社会化するルールは未成熟であった。

(4) コレラをきっかけとした上水道建設

「水屋」を水の運び手とする構造は、微妙な需給バランスの上に成り立っており、まちの人口の増大と共にこのバランスが崩れ、コレラの発生によって急激に崩壊を迎えることになった。コレラの流行により、衛生観の発達とともに上水道が敷設されるまでの大まかな流れを年表にしたのが表1である⁸⁾。

明治 年度	表1 上水道敷設までの主要な動き	
	できごと	
10年	・コレラ流行	
11年	・大阪府からコレラ流行のため飲料水に関する注意が布達	
12年	・コレラ流行（15年にも流行）	
18年	・コレラ流行・大洪水	
19年	・大阪府「飲料水営業取締規則」制定	
20年	・コレラ流行	
21年	・大阪府「井戸取締規則」制定	
23年	・（この頃、水屋は河水を濾過して売る工夫をするようになる）	
25年	・濾過の必要性より「飲料水営業取締規則」が改正	
28年	・大阪府「衛生組合準則要項」	
	・コレラ流行・「室町焼」という大火	
	・大阪私立衛生会「上下水道改良工事緊急着手の建議」→水道創設事業の決議	
	・水道工事開始（28年竣工）	
	・大阪飲料水販売組合より要請書→却下	

このように、コレラの発生に併せて、水道が成立していくのであるが、明治23年10月21日の大阪毎日新聞に「汽車ができて車夫嘆き、電燈起こって油屋嘆く、当市に水道成らんとして飲料水営業人痛嘆せり、其人数は4区500人に下らずという。」とあるように、「水屋」は廃業、転業に追い込まれた。

水道により、上町水系への水の需要も減り、それと合わせるように、台地の賑わいも引いていった。ひっそりと湧いていた水も人が使わなくなるのか、あるいは地下鉄の工事などで水脈が変わったのか、徐々に涸れていった。ただ、「亀井水」「愛染井戸」といった「霊水」は今も湧いている。

上町台地湧水群は、日常の飲水を基礎としていたことで、欠くことのできない水源として見なされ、湧水という点から「七名水」という面への拡大を果たした。飲用の必要性和聖性が結び付いたことで、「賑わい」を形成していたとも考えられる。この水源が水道にとって代わられたことで、湧水は人びとから忘れ去られるようになっていった。

3. 天王寺七名水と人びとのかかわり合い

以上のように大阪の水事情を歴史の段階ごとに概

表2 名所案内に見られる上町台地湧水群の一覧

西暦	1675	1780	1855	1860	1936	1991
文献名	蘆分船	撰津名所図会	浪華の賑ひ	撰津名所図会大成	上方8号	現在の状況
名水の名称						
亀井水(森)		●	●			遺跡
玉造清水		●	●	●	●	消滅
二つ井戸		●	●	●	●	遺跡
梅之井				●	●	遺跡
柳の清水				●		消滅
愛染井戸					●	●
岸の水					●	遺跡
有栖の清水		●	●	●	●	消滅
清水の龍				●	●	消滅
金龍清水				●	●	消滅
銀龍清水					●	消滅
大江岸水					▲	遺跡
増井清水		●	●	●	●	▲
安居清水		●	●	●	●	▲
逢坂清水	●	●	●	●	●	遺跡
玉出の水					●	遺跡
亀井水	●	●	●	●	●	●
谷清水					●	●
産湯清水			●	●		遺跡

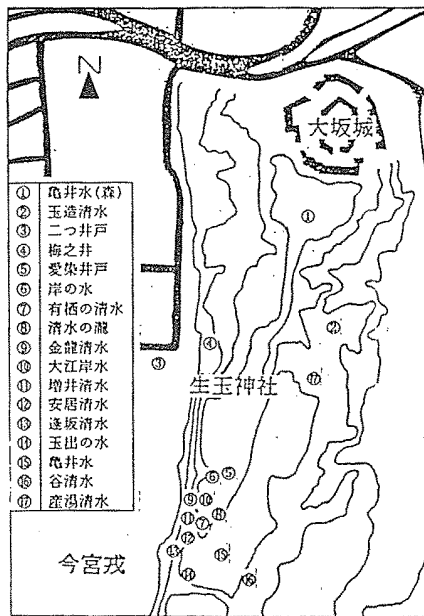


図7 上町台地湧水群の分布(作製:近藤)

り上げる。それをまとめたものが表2(比較のため昭和11年『上方』の記事¹³⁾と現況も加えた)であり、各名水の位置を図7に示す。

(2) 記述の分析による名水の構造化

これらの井戸・湧水における記述を分節化したものが表3である。名所としての湧水は、図絵によって当時の周囲の様子を示し、記述によって水の性質について記している。上町台地の名水に関する名所案内等の記述の評価視点は、「清濁」「甘味」「冷暖」といった

表3 名所案内における名水に関する記述の分節化

名水の名称	記述あり	水の記述—評価視点—				使用先	ゆかり
		清濁	甘味	量	冷暖		
亀井水(森)	★▲●					★●	入湯浴屋 霊験
玉造清水	★●	●					
二つ井戸	★▲●	★					近隣用水 おこし
梅之井	●		●				
柳の清水	●						
有栖の清水	★▲●	▲	▲				煮て茶に 七名泉
金龍清水	●	●	●			●	七名泉
増井清水	★▲●						七名泉
安居清水	★▲●						七名泉
逢坂清水	◆★▲●	★		◆★●	◆	用水、茶	七名泉
亀井水	◆★▲●	★				◆★●	歌、句
谷清水	●		●				
産湯清水	▲●	▲	▲	▲			稲荷

◎各記号は、文献との対応を示す。◆…『蘆分船』★…『撰津名所図会』▲…『浪華の賑ひ』●…『撰津名所図会大成』

観してきたが、その中で、上町台地の名水系が特に重要な位置を占めていたことがわかった。そこで、水事情の背景を基にしながら、この名水が人びとどのような関係にあったかを細かくみることにする。

(1) 江戸期の名所案内に記された名水

この、天王寺を中心とする湧水群が大きく取り上げられるのは、江戸時代の町人文化が発達した頃であった。本研究では、特に大阪の町人と天王寺名水との関係を明確にするために、大阪の名所を記したのものとして1675(延宝3)『難波名所蘆分船』⁹⁾、1780(寛政9)年『撰津名所図会』¹⁰⁾、1855(嘉永4)年『浪華の賑わい』¹¹⁾、安成期の『撰津名所図会大成』¹²⁾における上町台地湧水群の記述部分を取

水の性質と、水の「量」、そして「霊水」に関するものに分節化できることが分かった。つまり、図8のような関係が上町台地の名水に対して人びとから抱かれていたのである。例えば逢坂清水は、「一心寺門前の西にあり。この辺七名泉のその一箇なり。小坂清水ともいふ。清冽にして四時増減なし。この所の用水とす。茶に可なり」というように記述されている。そして、「逢坂の関の清水を汲み上げり。手に結びあげ、口すすぎ、無明の酒の酔ひ醒す。」(近松門左衛門『曾根崎心中』¹⁴⁾)というように、お初めのどを潤すものとして登場するのも、この清

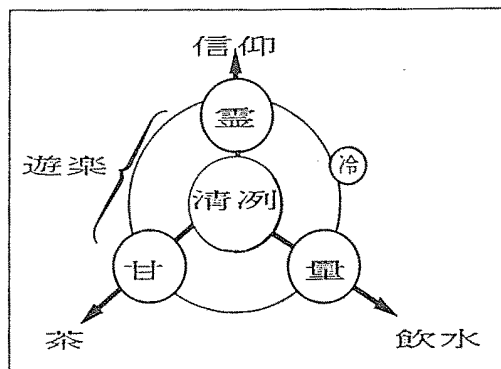


図8 上町台地湧水群の評価視点

浄さの評判からであるとも言えよう。

上町台地の名水は、清冽さを第一とし、その姿より霊水へ、また量の点からは飲料水として、そして甘味という味の点では茶という遊楽として捉えられていたと言えよう。湧水・井戸は、名もない井戸端から神社に祀られた井戸まで人間と様々ななかかわりあいを持っているが、上町台地の湧水群の場合は、「清浄」が最も評価されていることが特徴である。現状では「霊水」という関係だけが残っているこの湧水群が、当時は飲料水と遊楽に関わっていた。

4. 天王寺七名水の近年の状況とことおこし

(1) 近年の状況

1936(昭和11)年の雑誌『上方』の「天王寺名水巡り」にもあるように、昭和期に入っては、水は涸れる一方となった。「天王寺七名水」もなくなりつつあるが、「愛染井戸」「清水の瀧」「亀井水」は、信仰と結び付いた厚い保護があるためか、今でも手入れが行き届き、清冽な上町の水を見せている。

(2) ことおこしへ「上町台地水めぐり」

このような、上町台地湧水群に抱いていた人びとのかかわりあいを再現し、もう一度上町台地の持つ真の姿を見せるために、イベントーことおこしを行った。環境再発見ウォーキング「上町台地水めぐり」であり、そのコンセプトの中心は『あなたは水屋で

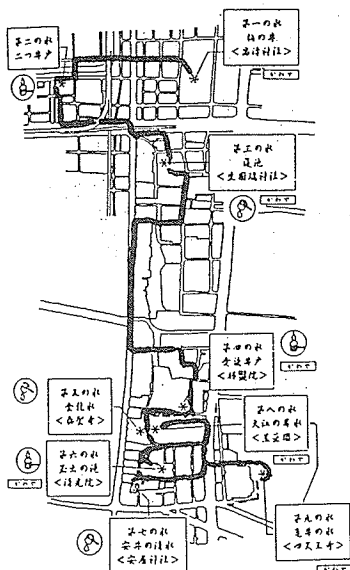


図9 「上町台地水巡り」の全体図
(参加者配布パンフレットより)

す』であった。参加者に竹筒を配布し、図9にある九つのポイントを順番に歩くもので、水の残るポイントでは水を汲み、それを竹筒で運び、水の涸れているポイントにかけるという「水分(みくまり)の儀」と名

付けた仕掛けを演出した。これは、上町台地の水を市民に運んでいた「水屋」を演じることで、上町台地の持つ水文化の構造を内生化させたものである(図10)。

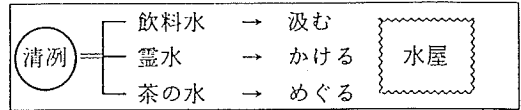


図10 名水の構造とことおこしのコンセプト

当日は、大阪市民を中心に約300人が参加した。当日回収のアンケートからはおおむね満足の回答であった。詳細は別途報告する¹⁵⁾。また、このイベントは、上町台地で行った『太陽を取り戻します』、『緑という種を蒔きます』に続く第3回目のコンセプトの提示である¹⁶⁾¹⁷⁾。

5. まとめ

本研究は、大阪上町台地の湧水群を素材として取り上げ、大阪の水文化の中での位置づけを行い、まちの貴重な水源としての立場を明確にした。また、江戸期の大阪の名所案内に見られる対象地域内の名水の記述部分について分析を行い、当時の人びとの上町台地湧水群への見方が、「清浄」を第一として、「量」-飲料水、「霊水」-信仰、「甘味」-茶(遊楽)に分かれている評価視点を示し、その構造を把握した。そして、この水の持っていたかかわりあいの構造を現代の中に再現するひとつの試みとして、ことおこしーイベントー「上町台地水めぐり」のコンセプトの中に内生化した。

このことより、大阪の水文化の中での上町台地湧水群を位置づけると共に、現代の暮らしの中への再構築の例を示し、これからの上町台地の環境づくりの中に歴史を組み込む糸口を提示した。

参考文献

- 1) 高木貞恵:「水のこぼれ話」, 創芸出版, p171, 1985
- 2) 「街能情」(浪速叢書(昭和2年)に所収)
- 3) 「新選増補大坂大絵図」(玉置寛次郎「大阪古地図集成」(財)大阪都市協会, 1975に所収)
- 4) 「難波名所源分船」(浪速叢書(昭和2年)に所収)
- 5) 山本博:「井戸と伝説」, 大阪市水道局, p87, 1965
- 6) 大阪市下水道局:「大阪下水道事業誌」, p35, 1993
- 7) 「天王寺水巡り」(『上方』第68号, 1935), 山本博:前掲書を参照
- 8) 大阪市下水道局:前掲書, 大阪市水道局:「大阪市水道80年史」, 1982, 大阪市教育情報:「大正大阪風土記」, 大阪府立文庫, 1928などより複製
- 9) 「難波名所源分船」前掲書
- 10) 「摂津名所図会」(浪速叢書(昭和2年)に所収)
- 11) 「摂津の歴史」(浪速叢書(昭和2年)に所収)
- 12) 「摂津名所図会大成」複製版
- 13) 「上方」第68号, 前掲書
- 14) 近松門左衛門「曾根崎心中」(森修他注「近松門左衛門集」小学館, 1972より)
- 15) 西山健一郎・樹元慶子・盛岡通・城戸由能・近藤隆二・原田弘之:「身近な環境づくりのための市民参加型イベント」, 日本環境教育学会第2回全国大会, 1991
- 16) 盛岡通・近藤隆二:「まち巡りの体験開発による環境づくり支援」, 第3回環境学4研究, VOL18, 1990, PP38-43
- 17) 近藤隆二・盛岡通:「場所の固有性からみた地域の解釈と再構成に関する研究」, 第13回土木計画学研究発表会, 1990, p401-406